〈研究ノート〉

美濃古窯研究小史

井上喜久男

1. はじめに

美濃古窯の研究は桃山茶陶の研究から始まっている。昭和5年に岐阜県可児郡可児町久々利大萱の牟田洞窯跡から志野筍茶碗片の発見を契機として美濃に所在する古窯跡の関心が高まり、それ以後数年間に可児・土岐・恵那の三郡にまたがる地域において桃山陶器窯跡のあいつぐ発見となったのである。それらの調査は今日から見れば盗掘と呼ばれる無計画な好事的意図からの発掘で、出土した多量の陶片類はその出土窯跡が記録されないまま散逸してしまい、わずかに残された出土陶片や調査記録により復元的に考察するしかなくなってしまった窯跡すら存在している。そうした発掘ブームと言われた事態の経過後、美濃桃山陶器の研究は、伝承による分類研究から窯跡出土資料による実証的な研究へと進められるようになったのである。一方正式な調査は学術的や高速自動車道路建設の行政的な調査などの考古学の発掘調査が行われている。

美濃古窯の研究は桃山茶陶の研究から始まり、古代・中世・近世へと連続する時期の窯業形態を明らかにして、現在では、一部に未解明の時期があるものの美濃古窯の展開過程を連続して考えられるまでになっている。

本稿では美濃古窯跡の研究調査のうち、桃山陶器窯を中心にして研究過程をたどってみたいと考えており、桃山陶器窯を中心とする美濃古窯の形成過程は別に論じたいと考えている。

2. 明治・大正から昭和4年まで

美濃における志野・黄瀬戸・瀬戸黒・織部の茶陶などがいまだ知られていない時代である。すべてが瀬戸で焼成された瀬戸焼として伝説的に信じられており、窯跡の実証的調査研究が全然行われていなかった。

田内梅軒の『陶器考附録』（安政2年序）には瀬戸窯志野焼として「志野宗信物数寄ニテ呂宋白薬ノ沓鉢ヲ茶碗トス是ヨリ志野茶ワンノ名出ツ後今井宗久ヘ伝ハリシ由名物記ニ唐モノトアリ此茶碗ノ出来振ヲ尾州ニテ写タルヲ志野焼トイフ」とあり、志野焼の名称を志野宗信が所持していた白薬茶碗に由来し、その茶碗が唐物であり、尾張において写したことから志野茶碗と呼ぶようになったことを伝えている。また瀬戸窯織部焼として「古田織部正呂宋ノ黒薬沓鉢ヲ形ニシテ尾州ニテ写サセ画ハ小児ニカカセシト云故ニ画ヤウ何トモ見分カタシ」とあり、志野焼同様に呂宋製品の写しとして考えている。

『観古図説』巻五（明治10年刊）には「志野ト呼ベル焼物ノ始メハ志野三郎右衛門宗信ノ好ミニテ尾州瀬戸窯ニ於テ作リタルモノト思フ大永ノ年号ノ有ル志野ヲ見ルニ宗信ノ時ノ物ト大畧同シ白薬光沢沈シテ薬モ土モ石ノ如シ其次年ノ物ハ固シト云ヘトモ火度ノ弱キカ故ニ土モ弱クシテ薬リ有リ其後年ノ物ニ至リテハ又一層軟カナリ○志野ハ足利義政ニ仕フ松陰軒花香合1号アリ志野流ノ香道ノ祖ニシテ香道ノ書ヲ著ハセリ○志野焼ハ瀬戸ノ内ニテモ赤津村ニ於テ作リシナラント思考ス其所以ハ同地ニテ作ルモノハ今ニ此風ノ物有ルヲ以テナリ○義政ハ延徳二年ニ薨ス延徳二年ハ今ヲ歴

ル事三百八十八年前ニ当ル之レヨリ三十一年下リテ大永元年ナリ」と記されており、『陶器考』の内容を詳説したものである。

このことは天明5年の『志野焼由来書』に「伝え言文明大永年中志野宗信という人ありて茶道を好む故に其頃加藤宗右衛門春永に命じて古瀬戸窯椿窯にて茶器を焼出す是を後志野焼と称す」と書かれており、この説に従ったものと考えられる。また『観古図説』では志野焼に大永元年銘のある製品が存在していることを記しており注目される。

一方織部焼は古田織部が好みとする焼物で、『草人木』（寛永三年初版刊）に「茶碗ハ年々ニ瀬戸ヨリノボリタル今焼ノヒツミタル」と記されている沓形茶碗を指しているものと解釈されている。

その後の明治時代は江戸時代の茶書による説をそのまま信じ、黒川真頼『工芸志料』（明治11年刊）、古賀静修『陶器小志』（明治23年刊）、高木如水『鑑定秘訣陶器類集』（明治32年刊）など同類の説明である。その中で『陶器小志』、『陶器類集』では古窯文書の系図による窯の展開が論じられ出している。

明治末年から大正年間には国史教育として中央文化に対する地方文化の由来を調査することが行われ、窯業の起源を調査し、碑を建てて顕彰する気運がおこり、伝記の調査、古窯文書の発見により、加藤一族の陶工の系図がたどられるようになり、美濃の諸村の開窯年代を考えるに至っている(注1)。しかし窯跡については実際に発掘して確認することはなく、古窯文書に記されている窯跡が美濃の山中に分布していることを伝聞程度にしか認識しておらず、どのような陶器が焼成されているのかは全く不明であった。そして志野焼、織部焼の茶陶類は江戸時代以来の瀬戸窯で焼かれたものであるという伝説を信じて疑わなかったのである。

3. 昭和5年から昭和30年まで

昭和4年までは古窯文書の調査が進むことにより美濃の古窯跡が加藤一族の系図をもとにして比定されていったが、実際の発掘調査は着手されてはいなかった段階であった。

昭和5年に荒川豊蔵氏が大萱牟田洞の古窯跡から志野の陶片を発見したことにより、志野焼の産地が美濃であることが判明し、そのことが端緒となり、続々と古窯跡が発見されることになったのである。これまで志野焼・織部焼として尾張・瀬戸窯で焼かれたものと信じられてきたことが、窯跡の発見という基本的作業により、産地が確認されたのである。荒川豊蔵氏の牟田洞窯跡での発見は現在あまりにも有名になっているが、その後に志野窯発掘に至る動機について語るところによれば、次のようであった。荒川氏は昭和5年4月18日に北大路魯山人氏の星岡窯の作品展を名古屋で開いていた時に、二人して名古屋の関戸家の鼠志野香炉と志野筍茶碗を入念に見る機会があり、胎土の具合、底部のトチン跡、火色の出方などが瀬戸のものと異なることを感じ、瀬戸以外の窯業地を考えるようになり、四・五年前に大平・大萱の窯跡を調査に行った時に大平の窯跡の近くで織部の破片を拾ったことを思い出して、改めて翌日大平・大萱の窯跡を調査し、大萱牟田洞窯跡において一昨日見た志野筍茶碗と同文様の陶片を発見したのである(注2)。

以後半年間に、荒川氏は地元の人に窯跡の所在を尋ねて探すことにて大萱窯下窯跡、中窯跡、大平窯跡、高根窯跡、浅間窯跡、隠居山窯跡、元屋敷窯跡、定林寺窯跡、水上窯跡、猿瓜窯跡、大川窯跡を調査し、昭和6年になると郷ノ木窯跡が発見され、やはり志野が焼かれていることが確めら

れた。

美濃の山中に発見された桃山陶器窯に興味を持った毎日新聞本山彦一社長は井上吉次郎氏を担当者として美濃に遣わし、大萱・大平・久尻・笠原・大川・水上・郷ノ木・妻木の各地区の窯跡を大々的に発掘を行ない、多量の陶片を採集したのである。また昭和7年には大萱窯下窯跡が加藤唐九郎氏により発掘調査されたのである。窯下窯跡からは文禄二年八月銘の黄瀬戸陶片が出土して年代を決めることができる重要な窯跡として注目された。

こうした陶片を求める好事家が美濃に殺到することにより、これまで全く無縁なものとしか考えていなかった古窯跡出土の陶片が、商品として高価に売買できることを知った地元の村の人々が、競って各地の窯跡を掘り、ほとんどすべての窯跡が乱掘される発掘ブームが起ったのである。残念なことに全てが陶片を求めての発掘であり、窯跡をも合せて記録がほとんど残されておらず、出土資料も散逸してしまったことは惜しまれてならない。

この発掘ブームの中にあって多治見工業高校の高木康一氏は窯跡が乱掘されて出土陶片が散逸することを惜み、学校として窯跡調査を行ない、出土資料の収集に努め、多量の陶片類を出土窯跡別にラベルを貼付して銘記し、保管されたのである。この陶片資料は今日まで同校に収蔵保管されて、地元に残る古窯跡出土資料として貴重なものとなっている。

昭和初期の発掘ブームによる乱掘は古窯跡出土陶片を厖大な量とし、そこから得られる研究資料も増大し、美濃窯に対する認識は飛躍的に進む結果となったのである。古窯跡の発見と発掘により、古窯文書に記載されている加藤一族の古窯跡として比定され、各地区の窯の開窯年代を古窯文書にあてはめて考えるようになった。また志野・黄瀬戸・瀬戸黒が同時に同じ窯で焼成されていることが判り、加賀・前田家旧蔵の白天目茶碗も志野の窯で焼かれたものであると認識を持つに至っている。そして窯跡の出土陶片から釉薬の調子、火色の発色は窯跡の構造上からくる焔の調子の違いによるものと考えるようになったのである(注3)。井上吉次郎氏は大規模な発掘を行なった大萱窯(注4)、大平窯(注5)、笠原窯(注6)の調査結果を次々に発表していった。さらに瀬戸窯の調査の成果をふまえて美濃窯について考察を加えている(注7)。瀬戸窯は椿窯以降次第に山奥から里近くに窯跡が移っていき、園六洞窯や菊畑窯に達している。施釉陶器の需要増大に伴ない、瀬戸窯の規模が拡大発展していくことにより、工人の専門化が進む。工人集団の増大はやがて生活領域の平面的増大により、生活安堵の地として自然に美濃の山へ移る工人があり、山茶碗以後絶えていた美濃の山を再興したもので、瀬戸窯の地域が拡大したものと考えて、瀬戸物に対して美濃瀬戸であるとしている。美濃瀬戸窯は瀬戸・瓶子窯にみられる白釉が美濃で大きく発達を遂げたものと考え、土岐市内に瀬戸系施釉陶器窯が存在することを知りながらも、窯跡数が少ないことや、桃山陶器への系譜がたどられなかったことから、美濃への移動を考えるには至らないと軽視してしまい、工人移動は桃山時代になってからとしたことが惜しまれる。志野の発生については白い釉色を求めて釉薬から灰分を除き、長石単味のものを使うようになり、自然の発達過程によりいつのまにか生まれたものであると考えている。このように美濃と瀬戸の窯跡の発掘調査を基礎にして、両者の関係を出土陶片の比較検討と窯跡の分布状況から総合的考察をしたものであり卓見であったといえよう。

一方黄瀬戸は黄瀬戸釉という特別な釉薬の発見から生れたものではなく、灰や土の鉄分が自然に

酸化したものであり、意識したものではないとする説がある(注8)。 またそれは古瀬戸から存在する退却青瓷であるとも考えられている(注9)。 黄瀬戸の種類としては瀬川昌也氏は三種類に、即ち第一類釉薬の薄い所謂銅羅鉢の種類（油揚の手）、第二類釉薬が厚く硝子面を持つ種類（ビードロ膚の手）、第三類無色又は淡緑の硝子釉のかかった種類に分類している(注10)。また加藤唐九郎氏は古瀬戸から桃山陶器までの灰釉を椿手、伯庵手、あやめ手、菊皿手の4つに分類し、あやめ手と菊皿手は釉薬の中に黄土等の鉄分を混合して酸化焔焼成を意識して作られたものであり、黄瀬戸としてはあやめ手と菊皿手以降のものを言うのが妥当であろうとしている(注11)。これより黄瀬戸は焼成状態の変化による焼き上りにより種類別されるのではなく、意図したものであるとして定義付けがなされたのである。またその後加藤氏は伯庵手の名称をぐ・のみ手と改めている(注12)。

瀬戸黒については加藤氏は色見をするために作られたものが作品として転化したものと考え、引出黒の手法が楽焼と同一であり、その発生の時期は楽焼よりも早いのではないかと推定している(注13)。

美濃における古窯跡の分布状況が把握されて、桃山陶器の茶陶類が焼成されていたことが知られるようになると、焼成品の種類や釉薬等の分類が窯跡出土資料を中心にして行なわれ、古窯文書による開窯年代を考慮しながら陶業史の体系化が行なわれていった。美濃窯の調査を最初に行なった北大路魯山人氏を中心とする星岡窯の同人達により、その成果をまとめて発表し、各窯跡における焼成品の種類と古窯文書の集成を行なっている(注14)。

また高木康一氏は地元において窯跡の出土品の収集を通して独自の調査研究を行ない、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部という焼成品の種類により窯跡を分類し、さらにそれぞれを細分することにより窯跡の展開過程による編年観を試みている(注15)。 志野は無地志野・線彫志野・鼠志野・赤志野・紅志野・練上手志野の6種類に分類した。瀬戸黒は黄瀬戸・志野とともに焼かれ、出土陶片の多さは色見として使用されたためではなく、引出黒の手法の難しさを物語るものとし、急冷による破損率の高さと考えた。また織部は連房式登窯で焼かれたもので、大窯焼成品の黄瀬戸・瀬戸黒・志野とは年代が異なり、新しい時期のものとし、織部黒・青織部・赤織部・白釉手織部の4種類に分類した。

一方釉薬の発達の研究の他に、田中静夫氏は窯体構造の変遷とともに焼成方法の違いに着目し、焼成技術の展開過程を通して編年観を打ち出した。即ち古窯跡の窯体構造とそれに伴う窯道具の種類と窯詰めの匣鉢詰め技法の変化により、古窯跡の体系化を行ない、さらに焼成器種の細分による編年的研究が行なわれた(注16)。現在行なわれている考古学的調査方法の基本的な型式編年研究の方法が行なわれ始めたのである。

このように昭和5年美濃に桃山陶器窯の存在が知られてから、以後数年間の古窯跡調査において美濃桃山陶器の研究は飛躍的に進展していったが、美濃窯の発見の契機ともなり、志野焼とその発生の時期と関連する志野の名称については未解決の問題として残されたままであった。美濃の古窯跡が発見されてからは志野と呼称する長石釉の器物が室町時代の志野宗信という人物と結びつけて考えることはなくなってはきたが、当時の古文献の茶湯日記に志野茶碗の記載があることから、長石釉製品と志野茶碗がどのような関係があり、また同一物を意味するか否かといった志野茶碗の実体の究明が進められていった。

志野茶碗の名称について、森川勘一郎氏は今井宗久日記の天文二十四年十月二日の紹鷗の茶会記の志野茶碗の記事、津田宗達並びに宗及茶湯日記の志野茶碗の記載や、天正五年の名物帳に今井宗久、津田宗及の二人が志野茶碗を各1個所持していたことが記載されており、その当時美濃窯で焼かれたものとしても名物帳へ新物を記載することはおかしく、美濃窯以前に他で志野茶碗が焼かれたのではないかと疑問を投げかけている。また森川氏所蔵の利休自筆の宗徳宛の茶道伝授巻に「天目四段アリ、其内三段ハ漢也、一段ハ和也、和をハ志野天目ト云ふ」云々とあり、志野天目が存在していたことを提示している(注17)。

志野が美濃の地以外の場所、瀬戸において発生したのではないかとする考えは瀬戸・美濃の調査が進み、瀬戸には黄瀬戸・瀬戸黒・志野を焼成した大窯が所在しないことが判明して否定されるに至った。このことは調査がさらに進んでいる現在においても変っていない。森川氏が指摘するところの志野茶碗について、加藤土師萌氏は『草人木』の「志野ハ珠光門下ノ篠通耳所持ノ義ナルベシ、通耳ハ宗達ノ父宗柏ト最モ善ク嘗テ明ニ航セシトキ宗柏名物七個ノ壷ノ一ヲ見本シテ模造十個ヲ兆ヘタルコトナド分類、コノ茶碗ハ当時唯二枚アリ彼ノ入明ノ時ニ求メ帰リタルヲ一ハ宗柏ニ一ハ紹鷗ニヤ伝ヘケン　堺鑑ニ紹鷗伝来宗久所持ノ同名茶碗ノ由ト附記セリ当時唐茶碗ト称スルハオオムネ青磁ナルガ如シ他人会四巻ニ出タル宗及ノ拝見記ヲ参照セバ思ヒ半バニ過クルモノアラム茶事録ニハ白磁ノ手ナリトアリ」から支那産のものであるとする。拝見記は「志野茶碗拝見申候ひらきわれらの茶碗よりこまかに覚候なりそへに有之あめふくりんふかし　土紫色也茶碗うすく候われらの茶碗より少也」と記載し、また宗及日記の天正十一年十一月十四日に志野花入が用いられ「道三ももじり道董ノももじり見合候道董ももじりハ珠光ノ也　道三ノももじりハ志野花入也　三分ホド道董ノももじりセイタカク候口ノブン高シムモンノ所高シしりなりスゲナク候モンアラク候金ノ色ソコグロクウハジラケタルヤウ也」とあり、金属器のものにも志野の名がつけられていることを指摘している(注18)。したがって文献に記載されている志野茶碗は現在の長石釉製品の志野茶碗とは異なるもので、天目茶碗と思えるもの、白磁の手のもの、銅器の花入と思えるものなどに志野の名がつけられ、所持者の名を冠したものであろうという説を出している。しかし現在の志野といわれるものがいつ頃から呼ばれるようになったかについては判らないとしている。また加藤氏は高木康一氏とともに中心となり、昭和24年に元屋敷窯跡の発掘調査を行ない、窯跡が室数13室（後年に再調査して14室となる）の連房式登窯で、唐津の鬼子嶽系の飯胴甕窯跡や道納屋谷窯跡と同一形式であると調査結果を発表した(注19)。古窯文書の『瀬戸大竈焼物並に唐津竈取立之来由書』に唐津窯を美濃に導入したことが記されていたが、窯跡の構造の比較により元屋敷窯跡は鬼子嶽系の唐津の連房式登窯が導入されたものであることを裏付けることになり、以後元屋敷窯跡が美濃における最初の唐津・連房式登窯としての認識が一般化していった。

戦後まもなくの元屋敷窯跡の調査を終わりにして、昭和5年以来の美濃窯の発掘による桃山陶器の探求は一段落した状態になるのである。そうした四半世紀の調査研究の成果は昭和30年代に至って加藤唐九郎・加藤土師萌・小山冨士夫の諸氏等によって集大成され、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の名称の発生と概要、古窯跡の分布状況などが明らかにされた(注20)。加藤唐九郎氏はこれまでの研究にそれぞれ考察を加えて黄瀬戸・志野・織部について論究している。黄瀬戸について、名

称は『槐記』(享保9年刊)がそのはじまりである。古瀬戸において偶然に発色した黄緑色を椿窯手の黄瀬戸と一般に称しているが、最初から黄緑色をねらい、技術的にも工夫をこらしたものが黄瀬戸と呼ぶものであり、志野同様に大窯で焼成されたものであるとした。それはぐいのみ手・あやめ手・菊皿手の三種類に分類され、タンパンを施さないぐいのみ手黄瀬戸は利休好みで、タンパンを施したあやめ手黄瀬戸は織部好みであろうと考えている。一方志野焼は志野釉の初現が瀬戸窯において長石が発見されたことによって始められたものとしている。茶会記にみられる志野茶碗なるものは、加藤土師萌氏が指摘しているように支那産のもので、現在の志野と呼ぶものが焼かれた年代は『清安寺由来記』に記載されている白薬手の茶碗を正親町天皇と後陽成天皇に献上した天正15年以前であり、白薬手の茶碗が即ち志野茶碗であると考えられ、天正15年をあまり遡らない時期であろうとしている。志野焼の名称は初めて茶会記『槐記』の享保11～14年に用いられており、それ以前の文献が「白薬手」「白茶碗」「白きもの」「白薬」と称し、『鑑定秘書』や『名器録』に「志野」及び「篠」の名称は大坂の城宗真が命名したことを記し、志野焼の名称と一致するところから、享保年間頃から用いられてきたものとしている。さらに現在呼称するところの志野焼は古い箱書が「織部焼」「織部シノ」「志の織部」などと書かれ、徳川中期以後の目利書がみな志野焼を織部焼の一種と説明しており、志野焼は織部焼の一種であるとしている。

調査された古窯跡については小山冨士夫氏により、1室町以前の窯(平安時代の窯、山茶碗窯、古瀬戸系の窯)、2桃山時代の窯、3江戸初期の窯と時代別に分類して、各地区の古窯跡の状況がまとめられている。

このようにして美濃窯は桃山陶器窯跡の発見以来、黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部といった茶陶を中心に調査研究が行なわれ、桃山文化の一翼を担うものとして位置づけられて、限られた茶陶の世界にのみその活路を持っていたとする一元的な見方でとらえられ、茶陶以外の大量の雑器類は捨てられた形となっていた。桃山陶器が生まれてくる過程については古窯文書に記載されているように陶工である加藤一族が、桃山時代になって瀬戸から美濃へ移住して製作した美濃瀬戸であるとする解釈のしかたが一般的な認識であった。

4. 昭和30年代以降

昭和20年代の末年から昭和30年代に入ると、国土開発による遺跡破壊が著しくなり、遺跡の保存と調査が急務となってきたのである。調査研究の範囲も窯業史に関しては古墳時代の須恵器窯から中世の陶器窯までにおよび、調査方法も美術工芸における陶磁器研究から古窯跡の考古学調査に基づく研究により、窯業史の体系化が進められるようになった。東海地方においては昭和29年から岐阜県可児郡兼山町の木曽川から知多半島の先端に至るまでの愛知用水工事が計画され、昭和30年から昭和37年まで古窯跡の分布調査と工事に伴う緊急調査を含めて須恵器・瓷器窯跡32基、山茶碗窯跡9基、常滑窯跡11基、瀬戸窯跡1基の合計53基の猿投山西南麓から知多半島におよぶ古窯跡の発掘調査が行われ(注21)、窯業史の暗黒時代といわれた平安時代から中世室町時代に至る編年体系が築かれたのである(注22)。また東三河地域は総合開発のため鳳来湖から西は蒲郡市へ、東は渥美半島の先端まで豊川用水路が引かれ、その緊急調査が昭和39年から昭和41年に行なわれ(注23)、さらに用水路の整備により渥美半島の埋蔵文化財が破壊されるおそれが生じ、事前調査に

より渥美半島窯跡の発掘調査が行われた(注24)。全国的にも中世窯の調査が進み、古窯跡が瓷器系と須恵系の二つ系統に分類されて地域色豊かな生産活動の展開を示すことが解明され、各地域の研究の基礎固めとなり、須恵器から中世への窯業史が体系付けられた(注25)。

東海地方は愛知・豊川の二大水資源開発工事に伴なう古窯跡群の調査から、個々の開発事業に伴ない愛知・岐阜・三重・静岡の各県の古窯跡群が調査され、古代から中世への窯業史の基礎ができあがり、古代須恵器窯から灰釉陶器窯へ、そして瀬戸・常滑の中世陶器窯への窯業の流れの中で周辺地域の岐阜・三重・静岡県下の古窯跡が位置付けられていった。

美濃の古窯跡については昭和32年楢崎彰一氏により美濃市丸山古窯跡が発掘調査され、白鳳時代の瓦を併焼していることから同窯の年代を天武朝のものとし(注26)、昭和33年には中津川古窯跡群の分布調査と発掘調査が行なわれ、平安時代後期の灰釉陶器窯から室町時代までの壷・甕窯、山茶碗窯の存在が確認された(注27)。また土岐市元屋敷窯跡が昭和31年11月岐阜県史跡に指定され、昭和33年に保存整備のための調査が行なわれ、室数14室に燃焼室の付いた全長24 *m* の連房式登窯であることが明らかになった(注28)。

猿投山西南麓古窯跡群が発掘調査され、古代から中世までの窯業史の体系が確立されると美濃窯全般にわたって再調査が行なわれて、古代から現在までの窯業史の流れがまとめられるようになった(注29)、市町村においては郷土史の編纂事業に伴ない、編年体系に基づいた窯業史の流れとして古窯跡の調査が始められている(注30)。

昭和45年になると中央高速自動車道路建設のための発掘調査が開始された。中央自動車道路は多治見市・土岐市に所在する美濃古窯跡群を縦貫する形となり、路線内の古代から近世までの灰釉陶器窯・山茶碗窯・美濃大窯・連房式登窯がその犠牲となって消えていった(注31)。その結果として多量の出土資料を獲得することにより、美濃窯の研究は新たな進展を迎えることになった。すなわち考古学調査により平安時代後期の灰釉陶器窯から江戸時代初期の連房式登窯に至る古窯跡出土の陶片資料と窯体構造が明らかになり、年代測定には熱残留磁気測定法による科学的に実年代の推定が行なわれ、より細かい編年体系を組み立てることが行なわれていった。古代の灰釉陶器から中世の山茶碗に至る過程については東海地方の窯業史の流れの中で編年体系が試みられた(注32)。また美濃大窯や連房式登窯の調査により窯跡の形態とを合せた系統的な検討などが行なわれ、これまでの黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部の通説に対して新たな問題を生じさせている。それらは室町時代の瀬戸系施釉陶器窯の再評価、桃山陶器の焼成以前の段階、即ち志野を焼成していない大窯の分布、窯道具の匣鉢詰め技法の相違による焼成器種の変化とそれに基づく古窯跡の編年、美濃における御深井釉の発生と青磁との関連についてなどが問題提起され(注33)、美濃窯全体の再検討の必要性が示されたのである。昭和49年には笠原町妙土窯跡(大窯)の発掘調査が行なわれ、窯と作業場がよく遺存した窯の全貌の形態と大窯による銅緑釉の使用の開始が確認された(注34)。そしてこれまでの研究成界の集大成として須恵器生産以来の美濃窯にかかわる窯業史の諸問題をまとめて発表したのである(注35)。桃山陶器の成立については瀬戸系施釉陶器窯から美濃大窯、連房式登窯と連続する生産体制が判明し、桃山陶器の形成過程の諸段階が明らかになったのである。

こうして美濃窯の研究は江戸時代以前まで系統的に窯業史が考えられるようになり、窯跡の研究

はさらに細かい諸問題と近世江戸期の解明、および製品として流通した消費遺跡の状況の研究に移ってきている。古窯跡の調査はこれまで土岐川以北の土岐市久尻地区および可児町大萱・大平地区が主体になって進められてきたが、昭和53年に瑞浪市大川東窯が発掘調査され、中馬街道筋の窯跡が明らかとなり、大窯と連房式登窯とその焼成品が判明した(注36)。そのうち連房式登窯は遺存度が良く、隔壁と斜め狭間孔などの窯体構造が解明され、操業年代と斜め狭間孔の発生についてなど新しい問題も生じている。昭和54年には土岐市隠居山西窯跡(大窯)が発掘調査され、織部黒と呼ばれている沓形茶碗や志野鉄絵皿が焼かれていることが判明し、連房式登窯でしか焼かれていないと考えられていた織部陶の始まりがすでに大窯で出現していたことが解明された(注37)。

連房式登窯の発生と織部陶の出現は土岐市元屋敷窯跡がその最初であると考えられてきたが、土岐市妻木町御殿窯が織部陶窯であり、陶枕を焼台に使う方法など唐津窯に類似点が多いことはすでに指摘したことがあるが(注38)、新たに御殿窯が織部陶の源流ではないかという考えが出され(注39)、またそれに対する反論も出されている(注40)。

美濃の古窯跡の成立の背景については多治見市所在の土岐川以北の中世陶器窯が伊勢神宮領内で成立しているという示唆ある研究が発表されている(注41)。

美濃古陶の消費遺跡の出土状況は平安時代の灰釉陶器が関東・東北地方を中心とする官衙遺構や住居址から、美濃大窯製品が15世紀から16世紀に成立の城館跡からの出土が多い。特に大窯製品は唐津窯や備前窯の製品及び中国陶磁が共伴し、歴史的にも年代が推定できることから実年代と窯業地別の関連性など、経済流通問題とを合せて新たな問題を解明する手段となり得る状況ができてきており、陶磁史の研究は新しい段階へと進み始めている。

注

1. 藤谷栄尾「岡山岐阜愛知三県陶器調査日記」考古界7－4・5　明治41年
2. 荒川豊蔵「美濃古窯発掘の思い出」星岡70(昭和11年)では4月19日であるが加納陽治『美濃の陶片』徳間書店(昭和48年)の当時の日記によると4月12日であり、前者が誤りと思われる。
3. 北大路魯卿「志野」茶わん1－5　昭和6年
4. 井上吉次郎「大萱窯上・下」茶わん1－8・9　昭和6年
5. 井上吉次郎「大平窯上・下」茶わん2－2・3　昭和7年
6. 井上吉次郎「笠原窯上・下」茶わん2－5・6　昭和7年
7. 井上吉次郎「瀬戸物と美濃瀬戸」陶磁4－1　昭和7年
8. 瀬川昌也「黄瀬戸茶入に就て」茶わん2－8　昭和7年、井上吉次郎「黄瀬戸」茶わん2－9　昭和7年
9. 塩田力蔵「退却青瓷」茶わん2－8　昭和7年
10. 瀬川昌也「黄瀬戸茶入に就て」茶わん2－8　昭和7年
11. 加藤唐九郎「黄瀬戸私考」茶わん2－9　昭和7年
12. 加藤唐九郎『黄瀬戸』宝雲舎　昭和8年
13. 12に同じ
14. 星岡窯研究所編『美濃ニ於ケル古瀬戸発掘』昭和8年

15. 高木康一「美濃における黄瀬戸・瀬戸黒・志野・織部」陶磁８－２　昭和11年
16. 田中静夫『土岐郡地誌』土岐郡教育会昭和８年
17. 森川勘一郎『志野黄瀬戸織部』昭和11年
18. 加藤土師萌「織部」陶説５　昭和28年
19. 18に同じ
20. 『世界陶磁全集』３桃山篇　河出書房　昭和31年
21. 愛知県教育委員会『愛知県猿投山西南麓古窯址群』昭和31～34年、同『愛知県知多古窯址群』昭和35～37年
22. 楢崎彰一「土器の発達」世界考古学大系４　平凡社昭和36年
23. 愛知県教育委員会『豊川用水路関係遺跡調査報告』昭和40年、同『豊川用水路関係埋蔵文化財調査報告』昭和41年
24. 愛知県教育委員会『渥美半島埋蔵文化財調査報告』昭和41・42年
25. 『日本の考古学』Ⅵ歴史時代上　河出書房昭和42年
26. 楢崎彰一「美濃市大矢田丸山古窯跡群の調査」日本考古学協会第21回大会研究発表要旨　昭和32年
27. 小山冨士夫「中津川の古窯址群」、楢崎彰一「岐阜県中洗井北第１号窯の調査」、吉田章一郎「岐阜県中津川市の窯跡発掘」陶説67　昭和41年
28. 楢崎彰一「久尻元屋敷陶器窯跡」岐阜県指定文化財調査報告書第７巻　昭和39年
29. 一ノ瀬武『美濃焼の歴史』昭和41年
30. 小板清治「中津川・坂本地内の鎌倉・室町期の古窯について」会報３　昭和42年、竹内蘭山『兼山古城山古窯発掘調査報告』昭和44年
31. 多治見市教育委員会『平尾遺跡・虎渓山遺跡』昭和45年、土岐市教育委員会『窯ケ根古窯址』昭和45年、同『土岐市中央自動車道関連遺跡』昭和46年
32. 田口昭二『美濃焼の起源を探る－美濃古窯の灰釉陶器と山茶碗の編年－』精華小学校昭和48年
33. 昭和48年東洋陶磁学会第１回大会にて今井静夫氏「瀬戸系施釉陶器窯について」、奥磯栄麓氏「御深井釉と青磁について」の研究発表が行なわれた。
34. 笠原町教育委員会『妙土窯跡発掘調査報告』昭和51年
35. 美濃古窯研究会『美濃の古陶』光琳社　昭和52年
36. 瑞浪市教育委員会『大川東窯』昭和54年
37. 今井静夫「美濃大窯と桃山陶」土岐市美濃陶磁歴史館一周年記念美濃桃山陶展図録　昭和56年
38. 楢崎彰一・井上喜久男『美濃古窯跡群』観光資源保護財団　昭和51年
39. 安藤実『源流を求めて織部』昭和54年
40. 37に同じ
41. 田口昭二「多治見の土岐川以北における中世陶器と池田御厨」美濃古陶１　昭和54年